

## 第7章 チンランとは何か

チンラン（人喰い）は人肉を喰らうが、村人たちの肉の記憶を辿っていくと、必ずと言っていいほど、話題に上るのはシャア（シカ）である。そのシャアは、狩猟の対象であり、常に人間に追われ、先へと逃げる存在であった。人びとはそれを追い、ラア（矢）を放つ。

一方、人間を追い、喰らおうとするのはジャア（トラ）であった。ジャアは森の奥に暮らし近づいた人間を突如襲う動物であると同時に、人間の暮らす世界から遠く離れた天上から人の魂を喰らいにやって来る存在（リイジャア）でもあった。

この追いつ追われつという関係の真ん中に位置するのが人間である。その人間とは、「チョオバン」とも言われ、それは結婚を巡り、相互に贈与する者、ブタ肉やロクシ（蒸留酒）を交換する者のことであった。また、そのような相互的な贈与に伴い、人びとはラス（恥）の感覚とニン（毒）という存在を同時に抱え込んでいた。

M村の人びとの父系の系譜を始祖の物語まで追っていくと、始祖の力の源泉となっているのが夫婦、すなわち性差であるということが見いだされた。そして、それに続くものは欲望であり、そこから欲望と贈与の応酬が繰り広げられるなか、物語が展開していた。

現在、M村の系譜と土地所有は深い関わりを持っているが、その土地所有を支える根本原理は、身体の延長としての土地や労働にあるのではなかった。人が所有権を訴える説明を支えるのは、対象を見つめる「眼差し」の力であった。それでは複数の「眼差し」同士の衝突が回避できなくなるが、衝突によりどちらか一方が譲らざるを得なくなると、そこに贈与が現れる。そのとき、贈与は相手の力を認め、同時に相手の負債感覚やラスに訴えることで相互的な関係を迫ることになる。

トンコロンと呼ばれる儀礼でも、父系親族はサンガ（祖先霊たち）に、この世に生きる人たちに話しかけたり、見つめたりしないよう説得し、様々な贈与をおこなっていた。その説得と贈与の道りは系譜を辿る過程ではなく、主に姻戚の形象を持った存在を天上の世界や地下の世界に尋ねる旅の過程であった。旅は、魂を飛翔させ、それを先へ先へと前進させる過程であり、マーパンデ（大シャーマン）という司祭やその話に聞き入る人の眼差しも、司祭の語りとともに一段一段上へ下へと進んでいく。その進路は東から昇って西に沈み、南回帰線まで遠ざかったのちに帰ってくる太陽の動きと重なるものだった。しかし、トンコロンは、旅であるのみならず、人びとにとっての父系親族の枠を再確認する場でもあり、同時に夫婦関係のあり方や、男女のあいだに横たわる性の力と贈与の力の関係、ブド（年寄り）とレンジャア（若者）という老若の役割、食物の贈与とその制限についての物語でもあった。

トンコロンは、そのような旅であり、物語でもあったが、何よりもサンガにこの世の人びとを病気にしないようにさせるための儀礼であった。そして、そのためにそれらに捧げられる供物は「人が普段食べているものすべて」であるだけでなく、全体の流れを示すと同時に起点と終点を結びつけるようなイメージを読み取れる形象を持

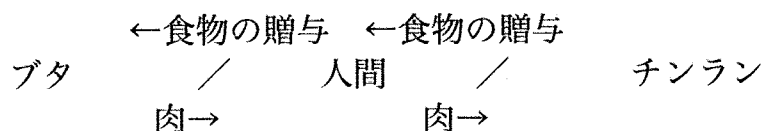
っていた。それらの形象は、流れが転回し、逆転する姿だとも言え、結局それが、サンガが人びとのもとにやって来るのを反転させるために機能している可能性が見出された。

ここまでを振り返ると、全体に通底するのは所有を支える力にもなっている眼差しとその流れの問題であると理解することができる。その眼差しは、太陽の軌道に合わせて前進し、躓きそうになったときには様々な存在を分割し、その分割の裂け目に性差を重ねて姻戚化し、相互交渉可能なものに変換してさらに進む。進むためには贈与が必要になる。贈与とともにラスとニンが姿を顕す。ニンは交換を促進すると同時にそれを破壊する外部でもある。

人間は前進し、生きていくために、眼差しを維持するために肉を喰う。人間、すなわち「チョオバン」は、シャアとジャアのあいだに位置しつつ、一方的に追い、追われるのではなく、相互にブタ肉を贈与し、それを交換する者である。

では、このブタ肉のように贈与、交換されるもののなかに、こっそりとニンのように贈与や交換を破壊する外部が入れているとしたら、それはどういうものになるだろうか。ブタ肉を贈与し、交換しているうちに、人間自身が死に絶えてしまう。ニン以外でそれを可能にするのは、人間の肉を喰らうことである。人間自身の肉がブタ肉に忍び込まされていたら、やがて人間は途絶えてしまうだろう。特に、ブタ肉の交換のきっかけを作る女性の肉が入っていたら、途絶えるのにそう時間もかからないだろう。そのような肉の交換の外部が想像される時、その肉（特に冒頭の物語では女性の肉）を喰う存在としてチンランの姿が浮かび上がってくる。

あるいは、このようにも考えられる。贈与によって生きる「チョオバン」は、ブタに普段一方的に餌を与え続ける。しかし、そのような一方的な贈与は長続きせず、人間は最後にはそれを殺害し、その肉を分配して喰ってしまう。そのような現実があるときに、人間に一方的に食物などを贈与する存在が現れたら、どうなるか。それも人間をいつか喰ってしまう、ということになってもおかしくない。



そう考えたとき、筆者がチンランと呼ばれたときに、村人たちに挨拶代わりとして大人にタバコ、子供に飴を渡していたことが思い起こされる。それもまた筆者に対するチンランという想像を助長したのかもしれない。また、M村で飼育されるブタのような毛が筆者のスネに生えていたことも、ブタの反対物でもあるチンランを思い起こさせたのかもしれない。

いずれにしても、チンランという異人表象は、この地の人びとにとっての世界を構成する基本原理である眼差しを補完するような相互的な贈与の外部や超越者として想像されたもの、として捉えることができる。

それと同時に、ここではシャアとブタの肉を一方的に「切断」して自らに「接続」しつつ、ジャアとチンランからは一方的に「切断＝接続」されることを怖れる存在として、それらを相互的な交換の外部に「排除」しつつ、自らはそれらの中間に位置す

る空間に「包摂」されながら相互的な交換をおこなう存在としての人間の姿を想像することができる。チンランという異人表象から象徴世界を描き出すことで浮かび上がるのは、そのような平等主義的な「プラジャの存在イメージ」であると、ここでひとまず言うことができる。